様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２２５２

研究課題名（和文）近代日本における職業としての音楽評論家の成立過程

研究課題名（英文）The Establishment Process of Music Critic as a Profession in Modern Japan

研究代表者
白石　美雪（SHIRAISHI, Miyuki）

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：６０２９８０２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　近代日本において「職業としての音楽評論家」が成立する過程を、明治後期から昭和初期にいたる主要な音楽雑誌の編集方針や論調、日本諸学振興委員会芸術学会と「近代の超克」座談会の動向、東京藝術大学楽理科の設立から分析した。特に注目した評論家は大田黒元雄、遠山一行、吉田秀和である。その結果、大田黒の『音楽と文学』が楽壇を牽引する評論家の登場を促したこと、塩入亀輔の評論で音楽ジャーナリズムとアカデミズムの対立が胚胎したこと、総力戦大戦下で評論は洋楽を絶対視する傾向と諸民族の音楽で時局に応える傾向に引き裂かれたこと、東京藝術大学音楽学部楽理科の設置で評論家養成に新たなモデルが成立したことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本における「職業としての音楽評論家」の成立過程は音楽史研究において見過ごされてきたテーマである。音楽評論家の集団としての「音楽論壇」の成立と総力戦大戦下での全国学会での議論、東京芸術大学音楽学部楽理科の設置をめぐる経緯を詳らかにした結果、職業としての音楽評論家が時局を反映する評論活動を展開し、段階を追って近代西洋音楽を社会に定着させたことが明確になったことは、音楽史研究のミッシングリンクを埋める学問的意義があった。研究の波及的な意義は資料による歴史研究、個人研究に基づき、音楽評論そのもの、音楽評論家の職業と養成について、歴史的視座から現在の社会的機能や課題を論じる前提を確認したことにある。

研究成果の概要（英文）：The process by which “music critic as a profession” were established in modern Japan was explored through the editorial policies and tone of major music magazines from the late Meiji period to the early Showa period, as well as the relationship between Art Society in The Japan Association for the Promotion of Various Studies(Nippon Syogaku shinkou iinkai) and the "Overcoming modernity" roundtable discussion. Motoo Otaguro, Kazuyuki Toyama, and Hidekazu Yoshida were paid particular attention. As a result, it was found that Otaguro's "Music and Literature" prompted the emergence of critics who led the music world, and that during the total war, critics were divided between the tendency to regard Western music as absolute and the tendency to respond to the current situation with the music of various ethnic groups, and that a new model for training critics was established with the establishment of the Department of Musicology at Tokyo University of the Arts.

研究分野：音楽学　近現代の日本の音楽創作史および欧米における20世紀前衛音楽史、ジョン・ケージ研究

キーワード：音楽楽壇　日本の音楽評論家　日本の音楽雑誌　日本諸学振興委員会芸術学会　東京藝術大学音楽学部楽理科　遠山一行　吉田秀和　大田黒元雄

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代日本において「職業としての音楽評論家」がどのように成立したかは、音楽史研究の未解明のテーマである。西洋近代音楽を新たに受容した日本では、音楽評論（ここでは評論と批評を同義に用いる）は、近代音楽文化の成立と定着の前提をなしている。言説としての音楽評論を執筆した者は音楽評論家と呼べるが、「職業としての音楽評論家」に注目して、音楽論壇の形成と音楽評論家の養成プロセスを明らかにすることで初めて、現在にいたる日本の音楽評論と社会状況との密接な関係が解き明かされる。

２．研究の目的

「近代日本における職業としての音楽評論家の成立過程」と題するこの研究は、言説としての音楽評論とそのメディアの成立ではなく、「職業としての音楽評論家」の成立過程に注目することによって、音楽評論の社会的機能を解明するものである。「職業としての音楽評論家」を著名な人物中心の研究として行うだけでなく、音楽評論家の集団としての「音楽論壇（楽壇）」の成立に着目することで、評論を通じて近代西洋音楽の社会への定着に果たした、その機能を分析する。さらに近世からの教養人や近代高等教育機関の文学・美学分野の卒業者が中心であった養成プロセスに、東京藝術大学等の楽理科・音楽学科が位置付けられる段階までの変遷を解明する。

３．研究の方法

明治後期から大正期、昭和初期にいたるまでの主要な音楽専門雑誌として、四竈訥治の『音楽』（のちに『おむがく』に改称）、大田黒元雄の同人雑誌『音楽と文学』、塩入亀輔の『音楽世界』と『音楽雑誌フィルハーモニー』、山根銀二らの『音楽評論』、総力戦体制下の第一次統合で残った『音楽之友』と『音楽公論』、第二次統合で誕生した『音楽文化』と『音楽知識』、戦後、復刊した『音楽芸術』を取り上げ、個々の雑誌の編集方針を読み解き、そこに掲載された代表的な評論の読解と社会的な影響力を分析した。また、1920 年から 1929 年までの『音楽年鑑』に掲載された名簿から、音楽評論家・音楽記者・理論家（音楽学者）の一覧表を作って、音楽評論家が社会的に認知され、集団としての楽壇が形成されていくプロセスを跡付けた。

さらに、昭和史の大きな節目となる総力戦体制へ向け、政府に突き付けられた問題の打開策として設置された日本諸学振興委員会に着目し、芸術学会の動向を分析し、これを 1942 年の「近代の超克」座談会とあわせ読むことによって、総力戦体制下の音楽文化への視座を得た。戦後まもなくの改革期については、『東京藝術大学百年史』に掲載された膨大な資料と戦後に復刊した『音楽芸術』の評論から、東京藝術大学の発足と当初から設置された楽理科の存立基盤を探り、音楽評論家を輩出するアカデミズムが東京帝国大学美学美術史学科から東京藝術大学音楽学部楽理科へと開かれていくことを確認した。

個別の音楽評論家としては、とくに大田黒元雄と遠山一行、吉田秀和の業績に注目した。大田黒については彼の主宰した同人雑誌『音楽と文学』の傾向と彼のベストセラーである『音楽夜話』『続・音楽夜話』における文体が大正期、昭和初期の音楽受容に及ぼした影響を確認した。遠山については初期と渡欧以降の評論の変化を分析し、彼の主宰した雑誌『季刊藝術』の傾向と彼自身の評論活動を結び付けながら、「文学的評論」の成立を考察した。吉田については２０世紀音

楽研究所や子どものための音楽教室の発足に関わった経緯とその影響、また、戦時下から書き始めた評論の、晩年に至るまでの推移を跡付け、昭和期の音楽状況の中で果たした役割を考察した。

４．研究成果

本研究では、職業としての音楽評論家の成立という観点から、音楽評論家の集団としての「音楽論壇」の成立に着目し、最初の音楽専門雑誌である『音楽』から大正時代の『音楽と文学』、昭和初期の『音楽世界』などの雑誌の内容から、第二次世界大戦下での日本諸学振興委員会と東洋音楽学会の動向まで、評論が近代西洋音楽の社会への定着に果たした役割とそれらの機能を明らかにした。さらに、近世からの教養人や近代高等教育機関の文学・美学分野の卒業者が中心であった音楽評論家の養成プロセスとして、戦後に加わった東京藝術大学楽理科の開設事情を解明した。具体的に、音楽評論が日本における近代音楽文化の成立と定着に果たした役割について、次の 5 点がわかった。

（１） 大正期には東京音楽学校を中心にドイツ・オーストリア音楽が洋楽受容の中心だったが、大田黒元雄らの同人雑誌『音楽と文学』ではフランス音楽、ロシア音楽、イタリア音楽などを扱った翻訳や評論が掲載され、楽壇を牽引する存在としての音楽評論家の登場、すなわち「音楽論壇」の成立を認めることができた。同時期の音楽雑誌では評論家と日本人作曲家の論争が展開され、ここに評論家と創作家の価値観の分裂が観察された。

（２） １９２０年代に音楽評論家と称する人たちが増加し、『音楽年鑑』の名簿に掲載された音楽評論家の人数は 1920 年に 9 人だったのに対して、10 年の歳月の間に掲載された音楽評論家総数は 37 人になった。1930 年には『音楽世界』における塩入亀輔の登場によって音楽ジャーナリズムが覚醒し、昭和期まで続くジャーナリズムとアカデミズム（音楽に関する研究を重視する立場）の対立が胚胎する。

（３） 日本諸学振興委員会芸術学会の形成過程及び発表内容と 1942 年の座談会「近代の超克」の内容を比較検討した結果、洋楽を絶対的な基盤とした諸井三郎流の評論と脱洋楽をはかり諸民族の音楽を意識することで時局に答えようとした田辺尚雄流の評論の二極に引き裂かれていたこと、日本諸学振興委員会での方針にもかかわらず、「大東亜音楽」についてはどちらも具体策がないままだったということが結論として得られた。

（４） 第二次世界大戦後、東京音楽学校にはなかった楽理科が新制大学として東京藝術大学が成立した当初から置かれた背景を、『東京藝術大学百年史』と『音楽芸術』誌上における東京音楽学校の改革論から分析した結果、東京藝術大学音楽学部楽理科は戦後教育改革なしには成立しないものであったと捉えることができた。さらに、音楽評論家が高等教育機関で音楽学の専門教育を経て要請されるという新たなモデルの成立を確認した。

（５） 20 世紀後半を代表する音楽評論家として、遠山一行と吉田秀和を取り上げ、彼らの評論活動を方向づけた初期に遡り、全体像を把握した。戦時下の学生時代を経て、戦後復興から高度経済成長期まで、近代の自我という西洋的な理念を軸に展開された二人の評論は、きわめて近似的でありながら、方法においても文体においても差異が認められた。

これらの研究成果は個別論文ではなく、１冊の著作として 2023 年度に公開する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 白石美雪	４．巻 31
２．論文標題 『洋楽夜話』にみる大田黒元雄の音楽批評―その特徴と変遷	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国立音楽大学大学院研究年報「音楽研究」	６．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白石美雪	４．巻 32
２．論文標題 現代音楽の新常識「日本の現代音楽―新たな創造への歩み」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 音楽鑑賞教育	６．最初と最後の頁 58,59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 白石　美雪
２．発表標題 「日本の音楽界の50年とこれから」
３．学会等名 サントリー芸術財団50周年記念シンポジウムパネリスト（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 白石美雪	４．発行年 2023年
２．出版社 音楽之友社	５．総ページ数 -
３．書名 近代日本における職業としての音楽評論家の成立（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関